

ポール・ラファルグ著 田淵 晋也訳

『怠ける権利』(平凡社 1260円)

これまで無から有をうんでみせてきた錬金の術がやぶれ、にわかには世の経済がウヤになったけっか、巷に「働かせろ」との声があふるる昨今であるが、いまをさること130年まえ、「人間の権利などより何千倍も高貴で神聖な怠ける権利」を宣言し、「一日三時間しか働かず、残りの昼夜は旨いものを食べ、怠けて暮らすように努めねばならない」と主張する文書があらわれた。ほかならぬ「怠ける権利」である。この文章、1880年に発表されるや、全欧に大反響をよんだという。当然であろう。なにしろ労働者階級は「労働＝資本家による搾取」に苦しめられ、そのけっかの過剰生産は、「過剰消費」の強制となってブルジョワをも苦しめるという議論はたいへん明快である。くわえて「自由で怠け者のアメリカ人」は農業におおいに機械を活用しているとか、「もっと貧乏になるために働け」とかの——いまなお有効な——文句がならぶのだ。

ところで1848年の二月革命といえは、ついつい第2共和制をつくってしまい、おもわず復古王政を打倒してしまった政変であるが、意気あがる労働者側のこのときの要求のひとつが「働く権利」であった。「1848年の働く権利への反駁」という副題をもつ「怠ける権利」は、それへの公然たる反抗の書なのだ。だが、革命からほどない3月2日、新政府は「労働

時間短縮」をもちこんだ政令^{デクレ}を發布している。しかもそこには、すでに「働き過ぎは労働者の人格を損なう」旨の理由があり、これはラファルグの論と齟齬しない。つまり、「おお《怠惰》よ、芸術と高貴な美德の母、《怠惰》よ、人間の苦悩の癒しとなりたまえ！」と「怠惰礼賛」でしめくくった彼の主張は、じつは「働くな」にあらず、「怠けよ」だったのである。

ポール・ラファルグは、1842年、キューバ生まれ。9歳で家族とともにボルドーに移住。長じてパリ大医学部にまなぶも、学生運動に参加して放校処分となり、ロンドンにわたる。ここでマルクスの知遇をえた彼は、やがてマルクスの次女ラウラと結婚、岳父の著作の仏訳によりその思想の普及に尽力することとなる。「怠ける権利」には『資本論』への参照が多々みられるが、本書に併録されている、「資本」を「神」になぞらえたパロディ集「資本教」と、A.アレーやM.エーメ風味の短篇「売られた食欲」もまた、「資本」がいかに人間性を奪うかというテーマの作品であった。

1911年11月26日、70歳を目前にしたラファルグは、ラウラとみずからに青酸を注射する。遺書にしるしたとおりの、生活から楽しみをうばってゆく「老い」を拒んでの自殺であった。人間性を奪うものには断固あらがう——ラファルグはみずからの主義をつらぬきとおしたのである。

(ふくしま・よしゆき)